

ことば力養成講座
残暑がやっと立ち去りそ
ろだが、シヨウウインドー
はすでに「秋冬物」一色
だ。携帯電話は「秋冬モテ
ラシ」、旅行案内は「秋冬モ
テラシ」、季節感は一足先
に深まる。

ことばで、「秋冬物」と
いう言葉は一般の国語辞書
ではお目にかからない。商
品企画の現場で使われる業
界用語だ。
外国図書館の蔵書を調べ
ると、古くは京都・西陣の
織物同業組合が1931
(昭和6)年に発行した
「秋冬向懸賞織物図集」
に、「秋冬物」の記述がみ
つかった。
ファッションの都パリ
で、20世紀初めから綿・コ

レクシヨ。「春夏」「秋
冬」の年回開かれる。四
季を分する言ひ方は、服
飾業界が起るうか。
05年からパリコレに出品
する古田泰子さんによれ
ば、最近ではオールシーズ
ン、ふわっと軽い素材が基
本。秋冬でも夏物とコーデ
ィネットする「着回し」が
流行している。
温暖化対策として政府は
05年、夏の「ワールヒズ」、
冬の「ウォームヒズ」を提
唱した。暑ければ薄着、寒
ければ重ね着を励行する。
秋冬商戦でも環境志向が売
り物だ。
四季折々の表情があつて
こそ「秋冬物」の言ひは引
き立つ。気候変動で日本の
季節感が失われなことを
祈るばかりだ。
(桜岡七ター・近藤吉英)

英語落語 大学生が高座

授業の成果、ノリノリ
大阪樟蔭女子大



大阪樟蔭女子大(東大
阪市)が、大阪・難波千
日前の府立万葉会資料
館「フツハ上方」で英語
落語発表会を開いた。同
笑ひさせた。

24日の発表会に出演し
たのは5人。法被姿・高
座に上がり、古風落語の
「時とどん」の一部や小
真・非常勤講師として学
生を指導してきた桂かい
手本を見せた。

義。前期のみの授業で、
初年度は3回生26人が学
んだ。
まず、英語の合本を自
然な大阪弁の話言葉に
訳し、調子を保つたまま
英語に戻して語る。実技
指導は、理科教室の教卓
の上に座布団を敷いた。
「高座」で行った。
担当の藤藤良行准教授
は「型を覚えてバリエー
ションをつける学習法は
語学にうってつけ。日本
文化を海外発信する意味
もある」と英語落語の意
義を説く。
出演した3回生の岡田
真規子さん(20)は「ちゃ
んと聞かぬアカン授業や
けど面白かった。他の授
業では出てこない日常会
話のようなのがお身に付
いたと思う」、落語に触
れて日本の文化に興味が
わいたと満足した。
桂かい枝さんは「最初
は学生が集まってくれる
かどうか心配だったが、
みんな頑張った。自分を
表現する喜びも感じても
らえたと思う」と話して
いた。(高橋真紀子)

近藤准教授の

紙上特別講義

紛争地に普通の市民が
出かけ、寄り添うことが
人々の支えになるのです。

岡山大准教授 近藤 麻理

99年の和平合意 北
大西洋条約機構(NA
T-O)軍による空爆後の
99年、旧ユーゴ軍が和
平合意が成立した。国
連安全保障理事会の決
議で、国連コソボ暫定
行政支援団(UNMI
K)による暫定統治下
に入った。アルバニア
系住民の求める独立な
ど、地位をめぐる協議
は先送りされた。

国際協力と
ボランティア

おさらい
国際ボランティアをする際、専門的な知識
や技術があるは当たり前として、現地の人
や他のスタッフと調和できるコミュニケーション
能力があることが大切だ。異文化の中で
「他人に助けられる自分」と向き合うような
経験が「したる資質を磨く」。

学を学びました。修了時に
国際医療NGOのAMDA
(岡山市)に連絡し海外派
遣を希望したのは、「世界
の色な人にお世話になっ
た。何かしないとバチが当
たると思っていたからです。
紛争が起きていた欧州の
コソボにコーディネート
として派遣されました。最
初の仕事は、国際機関との
会議や活動の調整、診療所
で働く現地スタッフと通訳
を探さることでした。いすれ

もコミュニケーション能力
がものをいいます。診療所
スタッフは、村のリーダー
に地元医師や看護師を紹
介してもらい、その人たち
にまた友達を紹介してもら
いました。
現地スタッフは、自分自
信頼関係ができる、日
相手だからこそ、話せるこ

ともあるのです。診療所を
訪れる時はおいしい紅茶を
持参して、ゆつたりと会話
するよに心がけました。
【】
99年の和平合意キーワ
ード
1ドル140円を超え中から軍隊
が人道支援に来ましたが、
空爆の記憶が生々しいコソ
ボの母親たちは軍人に抵抗
感がある。「爆弾を落とす
ておいてなんだ」と。一
方、住民と同じ服装の支援
者には「遠い国の普通の市
民が私たちのことを気にか
けている」と感じ、安心す
るのです。

私が20代のこと、若者の
間は海外を貧乏旅行するの
がはやり始め、私もアジア
の国を旅しました。自分の
ことで精いっぱい、国際協
力など考えたこともありま
せんでした。
バンコクに滞在中、貧し
い地方から出てきて屋台(
ソムタム(パパイアサラ
ダ)を売る10代の少女たち
と出会いました。私にタイ
語を教えてくれ、彼女たち
なりの方法で助けられてま
した。前回「援助されな
ければ生きていけない自分
と向き合ふ経験が必要」と
話しました。まさにそのよ
うな経験でした。

タイ語を話せるようになる
と、同じ10代でも、外国
人を相手に水商売を必要さ
れている少女たちとも知り
合いました。彼女たちはエ
イズウィルス(HIV)や
ほかの病気になる、今で

は誰も生きていません。
30代のとき米国で4年暮
らし、タイが恋しくなって
舞い戻り、修士課程で保健
を学ばせてもらいました。

健康について描いた絵を日本語で説明する研修生と、指導する岡山大学の近藤麻理准教授(香川県綾川町のオイスカ四国研修センターで、伊ヶ崎忍撮影)

「宿題」患者や被災者など、「援助を受ける側」になつたときに体験した
うれしかったことを嫌だったことを5000字程度で書いてください。



「記者から」
被災地の取材で、大量
の資材と人員でバリバリ
と活動する欧米のNGO
や各国の救援部隊に目を
奪われました。彼らの働
きがなければ救済ない
命も多い。ただ、悲惨な
現場だからこそ、「茶の
み話」をするような日常
の感覚を持ち込むことも
必要なのかもしれない。
それだけで感謝され、恐縮
した経験が私にもありま
す。(小倉いづみ)